

阿刀田高著「紙の本・新聞は人間をつくる」2021年5月24日刊を読む

「活字の学びを考える」懇談会リレー講演 学校教育のデジタル化・子どもの未来講演録

2021年3月16日衆議院第一議員会館 大会議室

【講演】

「紙の本・新聞は人間をつくる」作家、活字の学びを考える懇談会会長

■ マージナリアと読書

1. 19世紀のアメリカの作家、エドガー・アラン・ポーの作品の中に、「マージナリア」というエッセイ集があります。マージナリアとは、本のページの余白のことであり、その余白に書き込まれた文章のことも指すようで、本を読みながら、「ばかやろう、こんなこと言っているのか」とか、「おまえが言うことは本当だ、俺はもう少し奥行きのある、こんなことまで考えたぞ」とかどンドン余白に書き込むことをいいます。ポーは大変な読書家でしたから、自分が本を読みながら、余白にいろいろ書いていました。書いたことだけを集めて、30ページぐらいにしたのが、ポーの「マージナリア」というエッセイです。
2. ポーがそれを書いた元の本を知らないと、どうしてそう言っているのかちょっと分からないところもあります。本の余白に書いたにしては、ずいぶん多過ぎるなと思いますが、それはちゃんとこのエッセイにも「実際、本の余白に書いたことではない」と断っています。そういう気分で書いたことを別のノートに書き留めたものも含まれていると言っています。ポーの「マージナリア」は本の読み方、読書のあり方としても、とても面白いのです。
3. 読書は人それぞれ、何でもいい、暢気に読んで、面白いなあと思うのも、大事な要素だと思います。ただ、読書でいちばん大切なのは、書き手と話し合っただialogをすることです。つまり、本の著者が、なぜこのテーマに挑戦しようと思ったのか。そしてまず、どこから手をつけ、どんなところで困難にぶつかり、それをどう解決して、結局どのように辿り着いたのか...
4. 私は教育者ではないので、そんなに若い人に接することはありませんが、3人ほど若い人に、新書本ぐらいのボリュームの本で一度マージナリアをやってみたら、と勧めてみました。挑戦した人はよい結果を得ているようですが、自分の好きな本、サッカーの入門書とか何でもいい、自分が一番好きだと思える本を読みながら、少し著者と対話をしてみたらどうでしょうか。まさに読書のいちばん大事なことで、自分と意見が違う、ここは同じだ、なるほど、こんな風に考える人がいるのか...ということが見えてくるのです。

5. 新聞を読むのも、やはり今回のマージナリアのような部分があると思います。私は今、3種類の新聞を購読していますが、1面のトップに何を置いているかに非常に関心があります。それぞれの新聞がトップに出すものは違っていい。同じものを扱っても、見出しだけでずいぶん違いがあります。それをじっと見て、読んで比較すると、新聞の背後から見えてくるものが確実にあります。これは、ウイルスが発生し、蔓延した結果、こんな世界が広がっている、のように、ぱっと出てくるものとはちょっと違います。活字の後ろから見えてくるものが確実にあるような気がします。

6. マージナリアのような読書を、若い人たちにぜひ勧めたい。特に中学生、高校生は、こういう読書を夏休みに一冊でいいからやってみるといい。人がものを考えるってことはどういうことなのかというプロセスが、ちゃんと見えてくるのではないのでしょうか。こういうことをきちっとやることは、新聞を読んだり、本を読んだりすることの基本ではないかと思います。

<コメント>

本を読みながら自分のコメントをどんどん書き込んでいくことは、まさに「時空を超えた著者との対話」の取り組みといえます。新聞を切り抜き、スクラップブックに貼り付け、コメントをどんどん書き込むことも全く同様です。このような「主体的な読書」「新聞を読んで考える」取り組みこそ、「思考力」「省察力」「自分で考える力」「批判的思考能力」を育成するものと直結します。この意見で「マージナリアと読書」というご提案は素晴らしいものと考えます。大いに活用させて頂きましょう!!

2021年6月15日—林明夫記—